

ステイト・オブ・テラー

STATE OF TERROR

ヒラリー・R・クリントン、ルイズ・ペニー著

小学館 2970円



◇Hillary Rodham Clinton—米上院議員、
國務長官などを歴任◇
Louise Penny—カナ
ダ在住の推理作家。

ヒラリー作戦慄の物語

アメリカ中間選挙では、民主党が予想外の善戦を見せた。その民主党でなお根強い人気のあるヒラリー・クリントン氏が書いた小説といえ、それだけで注目を集めてしまうのは本書の宿命だろう。だが、内容にも注目してほしい。犯人捜しの推理あり、家族の離反と信頼あり、お決まりの时限爆弾カウントダウンありで、娯楽読み物としても十分に魅力的である。

主人公はもちろん女性の國務長官である。彼女は、世界連続テロの意図を探るうちに、さらに大きな恐怖が迫っていることを悟る。背景にあるのはアメリカのイラン核合意離脱とアフガニスタン撤退だが、実在のヒラリーはそれらが核拡散のリスクを高めてしまうことをかねて指摘していた。その後の世界は、撤退後の空白へタリバンが復権し、面従腹背のパキスタンが国際テロ組織を招き入れてしまった結末を目の当たりにしてきた。今後の歴史が本書の戦慄の筋書きをなぞらないとは、誰にも保証できない。

中東情勢の危険な変数は、いつもロシアである。緊迫した状況下で、その盗聴を知りつつ主人公に真実を伝える手段は寓話だった。はたして寓話のライオンとネズミと猟師とは、それぞれ何を指すのか。それを正しく読み解けば、イランとアメリカは手を組むことができる。

共著なので、ヒラリーの貢献がどのあたりにあるかを推測するのも楽しい。安全保障会議の参加国が五つの言語で「くそっ」と言うあたりはたぶん違おうだろう。ホワイトハウスの豪華調度、某国外相の最悪のドレスセンス、同盟関係の意外なもろさなどは、彼女の筆かもしれない。アメリカとイラン。女性の大統領が登場するのは、どちらが先だろうか。ちなみに、夫のビル・クリントン氏も数年前に大統領を主人公にした小説を書いている。トランプ氏には真似できない芸当だろう。そういう知性のきらめきをもつということが、彼らの強みでもあり、また嫌われるところでもある。吉野弘人訳。

評・森本 あんり (神学者
東京女子大学長)